

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 7 月 31 日現在

機関番号：21501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24593425

研究課題名(和文) 定年退職後の高齢男性を対象とした地域活動への参加支援プログラムの開発

研究課題名(英文) participation support program development for community activities targeting elderly men after retirement

研究代表者

齋藤 美華 (SAITO, MIKA)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：20305345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：定年退職後の高齢男性を対象とした地域活動への参加支援プログラムにおいて、《地区のしくみが把握できる》《地区内の人と顔見知りの関係が築ける》こと、さらに、前者の下位には<地区の行事が分かる><地区内での有事の際の対応が分かる><地区内の人との関係性が分かる>が、また後者の下位には<地区内で自身の存在を認めもらえる><地区内の人とあいさつを交わせる関係になれる><イベントに関する情報交換ができる関係になれる>という概念を内包することの必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Creation of programs to encourage community activity participation targeting retired elderly men should target two categories: 'grasp of district structure' and 'establishment of a familiarity relationship with district residents.' The former includes three elements: 'understanding district events', 'understanding correspondence in case of a district emergency', 'understanding the district residents' relationships'. The latter includes three elements: 'recognition in the district', 'greeting relationships with district residents', and 'possible exchange of information related to events'. The two extracted categories suggest the necessity of including these elements.

研究分野：老年看護学

キーワード：看護学 定年退職 高齢男性 地域活動

## 1. 研究開始当初の背景

少子高齢化が急速に進行するわが国においては、元気な高齢者が支援を必要とする高齢者を支えることへの支援体制の検討が課題となっている。なかでも、団塊の世代とよばれる人々を活用した住民ボランティア活動など地域の支え手としての役割に期待が寄せられている。ボランティア活動をはじめとする高齢者の社会参加活動は、高齢者が年齢にとわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍できるとともに、高齢者ボランティアの活用は地域の担い手としてだけでなく地域の活性化を図る上でも期待されている。

地域を基盤とした介護予防事業やボランティアなどの活動は、女性が圧倒的に多く、高齢男性は少ないのが現状である。しかし一方で、地域活動やボランティア活動に参加したい人の割合は女性の23.9%に対して、男性は34.6%であり、実は男性の方が活動への参加意欲が高いことが報告されている。勤労者であった高齢男性は、高齢期にいたる前は、女性と比較して仕事中心の人が多く、地域との結びつきが薄いことが特徴としてあるため、地域活動への参加の一步を踏み出すための支援の重要性が示されている<sup>1)</sup>。さらに、高齢男性は女性よりも閉じこもりやすく、友人との交流頻度が乏しいという特徴が見られるなど男性の社会性の低さが示されている。高齢者にとってボランティア活動は、職業生活からの引退により喪失した役割を補填しうることで、地域の介護予防事業における高齢者のボランティア活動への参加は、ボランティア自身の介護予防にも結びつく<sup>2)</sup>ことが示されている。これらのことから、定年退職をした高齢男性に対して地域を基盤とした活動への参加の一步を踏み出すための支援を行うことが重要であるといえる。国内外における高齢者ボランティアに関する研究は、ボランティア活動への参加が高齢者の心身の健康に及ぼす効果について検証したものが中心であり<sup>3、4)</sup>、また地域活動においても定年退職後の高齢男性に焦点をあてたものは少ない。

高齢男性の地域活動(老人クラブや会などの集団活動)に参加するきっかけは、人からの誘いであり、広報誌や回覧板などを見るよりは、町内の友人や近隣など直接生の声で誘われることが行動を起こす一步となっていると報告されている<sup>5)</sup>。研究代表者による先行研究<sup>1)</sup>および科学研究費補助金若手研究(B)「定年退職後の高齢男性ボランティアに関する記述的研究」において定年退職後の高齢男性は、地域を基盤とした介護予防事業およびボランティア活動のいずれにおいても参加のきっかけとして、「地域とのつながりへの希求」「地域の友人や保健師からの直接的な誘い」が重要な要素として抽出された。つまり、定年退職後の高齢男性が地域を基盤とした活動に参加するためには、高齢男性自

身が地域とのつながりを希求し、直接的に地域のつながりから誘われることが必要である。このことは、地域とのつながりの薄い定年退職後の高齢男性であっても、定年前から地域との何らかのつながりをもっていることが、地域への一步を踏み出すための鍵になるといえる。仕事中心の男性が仕事を引退していきなり地域での活動に参加することは困難であることから高齢期の世代だけでなく、それより若い世代に対しても地域活動への参加を支援することの重要性と、定年退職後、いかにスムーズに地域活動に参加できるかが今後の社会参加の可能性に影響を及ぼすと指摘されていることから、高齢男性が定年退職後に早期に地域活動に参加していけるよう支援することが必要である。そのためには、準備段階として定年前の向老期世代に対して地域とのつながりを支援していくことが重要であり、これまで定年退職後の高齢男性という特定の集団を対象とした支援プログラムを開発していくことが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、定年退職後の高齢男性を対象とした地域活動への参加支援プログラムを開発することを目的とする。

## 3. 研究の方法

まず、定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりの意味を探求し、概念を抽出することで定年退職後、スムーズに地域活動に参加するための要素を盛り込む。次いで、それらの抽出された概念および研究代表者による科学研究費補助金若手研究(B)「定年退職後の高齢男性ボランティアに関する記述的研究」で得られた結果を基盤にプログラムを開発した。そして、プログラムの試案を作成し、評価および改良した。平行して、文献検討を行い、1)定年退職後の高齢男性の社会参加に関する先行研究を整理し、社会参加をするためにはどのような要因が必要となるのか、2)定年退職後に社会参加している高齢男性の特徴について明らかにした。

### 1) 文献整理による定年退職後の高齢男性の社会参加の要因の検討

2001年1月から2015年3月までに発表された国内文献を対象に医学中央雑誌 ver.5を用いて、2015年4月に検索した。キーワード「高齢」「退職」「活動」に該当する原著論文を検索した。該当した40文献のうち、定年退職後の高齢男性の社会参加に関する要因について記述のある文献17本を文献検討の対象にした。文献中の記述から定年退職後の高齢男性の社会参加に関する要因を各々抽出して質的に分析した。分析は記述した内容を最小単位のコード「定年退職後の高齢男性の社会参加に関する要因」とし、類似性に着目しながら抽象化し、「社会参加の基盤」「定年退職」「社会参加への誘導」「社会参加の

効果」の4つのカテゴリに分類した。

2) 文献整理による定年退職後に社会参加している高齢男性の特徴

医学中央雑誌 ver.5 を用いて、2015年3月までに発表された国内文献のうち、「高齢」「退職」「活動」のキーワードを含む原著論文46編を精読した。そのうち、認知症や脳卒中などの疾患に特化したもの、病棟や看護職に関するもの、リハビリテーションや治療、医療費に関するもの35編を除き、定年退職後に社会参加している高齢男性の特徴について述べられている11編を抽出した。

3) 定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりの意味の探求による概念抽出

定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりの意味を探求し、概念を抽出する。そして、それらを基盤にプログラムを開発するために、エスノグラフィーの手法を用いデータ収集・分析をした。

(1) データ収集および分析

データ収集の具体的な方法は、インタビューを主体とし、参加観察、インフォーマル・インタビュー、町の書類、資料等の採取を随時行い、インタビュー内容の裏づけとして分析に用いることとする。なお、データ収集と分析は同時進行で行った。

(2) 研究フィールドおよび研究参加者

**研究フィールド**は、A県B地区とした。

B地区は、政令指定都市内の西部に位置し、1989年より宅地造成に伴い人口が急増している新興住宅地である。2014年の人口は約6,900人で、高齢化率は約10.4%であった。

**研究参加者**は、B地区の向老期(40~60歳代)男性3人および一般情報提供者として、自治会長2人、向老期男性の家族1人、地区担当保健師1人を対象とし、インタビューを実施した。インタビューは対面式にて1人につき60分程度とし、個別に1回~2回、研究参加者の希望する場所で行った。

インタビューでは、主要情報提供者に対し、地域とのつながりに対する意見や考え、どのような地域とのつながりを持ちたいと思うかについて、一般情報提供者に対し、向老期(50~60歳代)男性の地域との関わりぶりについて回答に制限を設けずに自由に語ってもらい、その場で参加者本人の承諾を得て録音や書き留めを行った。そして事後に逐語録化したものをデータとして参加観察内容の裏づけとして分析に用いた。

分析は、インタビューの逐語録から、定年退職前の向老期男性が求める“地域とのつながり”に関する意味内容に着目し、その内容を表す最小単位の記述を抽出してコード化し、意味内容の類似性に基づき、カテゴリを組んでいった。

なお、カテゴリを《 》、サブカテゴリを< >で示す。

(3) 倫理的配慮

自治会長に文書と口頭で研究の主旨の説明と研究対象者の紹介を依頼し、紹介された

後、研究対象者に対し、研究者より文書と口頭で研究の主旨、匿名性の保持と目的以外にデータを使用しないこと、回答の部分的な拒否やいつでも中止することが可能であることを説明し、文書にて同意を得た。また、インタビュー時も再度同意を確認し、参加者から了解を得た上でテープへの録音を行い、プライバシーの保護に留意した。なお、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会における審査により承認を受けて実施した。

4. 研究成果

1) 定年退職後の高齢男性の社会参加に関する要因

文献検討の結果、定年退職後の高齢男性の社会参加に関する要因は、【社会参加の基盤】、【定年退職】、【社会参加への誘導】、【社会参加の効果】の4つのカテゴリに分類された。

(1) 【社会参加の基盤】

【社会参加の基盤】のカテゴリには<健康状態>、<経済的安定>、<配偶者の存在>の3つの要因が含まれていた。

<健康状態>についての要因は、健康づくりと趣味や社会活動は関連性が見られた<sup>6)</sup>、健康状態は老化意識を介して社会参加に影響を与える<sup>8,9)</sup>、疾患を1つ抱えている方がむしろ活動を高める場合がある<sup>8)</sup>、社会貢献のためにはまず健康でなければならない<sup>9)</sup>、健康管理や健康の維持のために地域活動に参加していた<sup>10)</sup>、外出時のADLの自立との関連性<sup>10)</sup>、疾患や自覚症状があると社会参加に対して消極的になる<sup>10)</sup>、健康に関する不安が活動意欲を衰退させる<sup>11)</sup>が含まれた。

<経済的安定>についての要因は、経済的基盤の安定は社会活動や趣味活動を行う余裕をもたらす<sup>9)</sup>、経済的不安が活動意欲を衰退させる<sup>11)</sup>、経済的安定があることが主観的幸福感を得るために必要である<sup>12)</sup>。

<配偶者の存在>についての要因は、退職後の男性にとって妻は自分を支えてくれる存在だけではなく旅行や趣味などを共にし、喜びを分かち合う存在になっていた<sup>9)</sup>。一方で、配偶者の存在を要因として否定する記述として、社会参加をしている人々は一人暮らしか夫婦のみの世帯が多かった<sup>10)</sup>。

(2) 【定年退職】

【定年退職】のカテゴリには<定年前における準備>、<定年による影響>の2つの要因が含まれていた。

<定年前における準備>についての要因は、退職を肯定的に受け止めていると退職前から退職後の生活に向けた準備ができていた<sup>13)</sup>、定年前に社会参加の知識や経験を得ることで定年後の社会参加に前向きな影響を与える<sup>14)</sup>、過去に社会参加をしていない場合は、高齢期に社会参加をするのが難しい<sup>15)</sup>、老化を強く意識するほど退職後の日常生活や社会参加に対して消極的になる<sup>7,8)</sup>、退職前から家庭や地域社会との交流を通して老化意識や健康度自己評価を保持・増進してい

くための環境を整備すること<sup>7)</sup>、加齢による心身の変化を肯定的に捉えられるような退職準備教育や学習活動の取り組みの必要性<sup>7)</sup>が明らかとなっていた。

<定年による影響>についての要因は、定年を機に社会と関わることで地域に貢献したいという願望<sup>14)</sup>、退職を契機にした自己の課題の明確化(健康面での課題、地域とのつながりがないことの実感、地域の一員としての自己の希求)<sup>1)</sup>が示された。

### (3)【社会参加への誘導】

【社会参加への誘導】のカテゴリには、<社会参加への誘導の方法>、<社会参加への誘導を促進・阻害する事柄>の2つの要因が含まれていた。

<社会参加への誘導の方法>に含まれる要因は、参加のきっかけは知り合いに誘われた<sup>6)</sup>、広報誌や回覧板で見るより直接、誘われる事が行動を起こす一歩となっている<sup>10)</sup>、高齢男性に保健師もしくは地域住民を介しての声かけが重要である<sup>1)</sup>、同じ立場で新たな関係づくりができるようにすること<sup>14)</sup>、定年後の短時間・短期間就労は身体活動量<sup>15、16)</sup>や健康意識<sup>16)</sup>を上昇させることで社会参加を促す、退職後の男性において就労は社会参加を促進する可能性がある<sup>17)</sup>ことが明らかとなった。

<社会参加への誘導を促進・阻害する事柄>に含まれる要因は、定年前は地域との関係が希薄である<sup>6)</sup>、地域で社会参加したいと思っても、気恥ずかしさや交流のきっかけや方法が解らず参加できない<sup>6)</sup>、社会活動の参加の有無に退職前の職業が関与している可能性がある<sup>10)</sup>、友人の有無だけでなく、親密性や本人の価値観などが社会参加に関与している可能性がある<sup>10)</sup>、退職後にも現役同様に働き続けることやその願望は仕事以外の社会参加を妨げる<sup>17)</sup>、情報通信技術に関する経験や知識が社会貢献活動を始めるための心理的ハードルを下げる助けとなっていた<sup>18)</sup>が含まれていた。

### (4)【社会参加の効果】

【社会参加の効果】のカテゴリには、<社会参加によって生み出される効果>、<社会参加を継続させる効果>の2つの要因が含まれた。

<社会参加によって生み出される効果>に含まれる要因は、健康づくりの重要性の認識<sup>6)</sup>、社会貢献を通してもう一度役立つ自分となり、役立つ自分に満足感や生きている証を感じている<sup>9)</sup>、社会貢献は自己の有用感や自尊感情を高める<sup>9)</sup>、挑戦という適度な刺激から得られるより高い充実感が必要である<sup>9、12)</sup>、社会参加によって精神的健康が得られている<sup>10)</sup>、一度社会参加することが活動的な高齢男性をふやすために重要<sup>10)</sup>、事業参加による課題の達成感<sup>1、12)</sup>、課題達成からのさらなる発展<sup>1)</sup>、自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感<sup>14)</sup>が示された。

<社会参加を継続させる効果>に含まれ

る要因は、講師に魅力がある<sup>6)</sup>、時間に拘束されない<sup>6)</sup>、友達がいるから続けられる<sup>6)</sup>、活動の中で継続のコツを掴む<sup>6)</sup>、活動に縛られない自由と楽しさ<sup>14)</sup>、さまざまな団体との交流や協働<sup>14)</sup>、活動の拠点があること<sup>14)</sup>が示された。

### 2) 定年退職後に社会参加している高齢男性の特徴

文献検討の結果、定年退職後に社会参加している高齢男性の特徴として、【若いころからの積み重ねによって築かれた基盤的特徴】、【退職準備段階の特徴】、【退職後の特徴】の3つのカテゴリに分類された。

なお、【若いころからの積み重ねによって築かれた基盤的特徴】には、<経済的基盤が安定している><sup>6、19)</sup>、<伴侶が存在する><sup>20)</sup>、<過去に社会参加の経験がある><sup>6、10、19)</sup>、<居住地域においてネットワークを持っている><sup>13、17、19)</sup>の4つのサブカテゴリが内包され、【退職準備段階の特徴】には、<人と繋がりのある職業をしていた><sup>10、12、17)</sup>、<退職前から地域において人との繋がりを作っている><sup>6、8、13)</sup>、<仕事以外の楽しみを持っている><sup>8、14、20)</sup>の3つのサブカテゴリが、【退職後の特徴】には<健康に対する意識が高い><sup>6、8、10、13、14、17)</sup>、<定年退職を契機とした自己への課題を明確にしている><sup>1、12、14、20)</sup>、<これまでの人生に対する満足感や達成感を持っている><sup>20)</sup>の3つのサブカテゴリが内包されていた。

### 3) 定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりの意味の探求による概念

#### (1) 研究参加者の概要

B地区の向老期(40~60歳代)男性3人および一般情報提供者として、自治会長2人、向老期男性の家族1人、地区担当保健師1人、向老期男性3人の居住年数は4~9年であり、全員、他県より移住であった。居住形態は、持家が2人、会社の借上げ住宅が1人であった。また、全員が輪番制などによる地区内の班長などの役割の経験があった。

#### (2) 向老期男性が求める地域とのつながり

B地区の向老期男性が求める地域とのつながりとして、《地区のしくみが把握できる》《地区内の人と顔見知りの関係が築ける》の2つのカテゴリが抽出された。さらに、前者の下位には<地区の行事が分かる><地区内での有事の際の対応が分かる><地区内の人の関係性が分かる>が、また後者の下位には<地区内で自身の存在を認めてもらえる><地区内の人とあいさつを交わせる関係になれる><イベントに関する情報交換ができる関係になれる>が抽出された。

向老期男性が求める地域とのつながりとは、就労していることによる働き続けるためのサポート的つながりを求め、地域とつながることで精神面の安定を保ち、身体的健康につなげていた。さらに、地域が仕事のフィールドになっている場合、社会・経済面を含めた生活の安定を得るため地域につながりを

持ち、地域からの信頼や人望など評判を得ること、また客層やニーズを探る意味もあった。

向老期男性にとって地域とつながるためのきっかけ作り求められる要素としては、【必然性によるもの】【活動の主体となること】【単純に行えるもの】が必要であった。つまり、輪番制であるなどの必然性があり、班長など活動の主体を担い、大がかりな事や細かな連絡手続きなど面倒なことがなく、単純であることが重要であった。本研究の参加者である向老期男性は、町内会の行事等において、「酒」を交わすことや趣味の「スポーツ」を行い、＜自分本来の姿が出せる＞、＜気分転換やリフレッシュ、開放感が得られる＞ものになっていた。つまり、具体的には「酒」や「スポーツ」が男性に共通した地域とのつながりの要素であった。

(3) 新興住宅地域における定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりの特徴

本研究において、向老期男性が求める地域とのつながりとは、《地区のしくみが把握できる》《地区内の人と顔見知りの関係が築ける》ことであった。

このことは、本研究の対象地域は、新興住宅地であり、参加者は、全員他県より移住しており、居住年数も4~9年と短い者が多かったことも影響しているものと考えられる。本研究における向老期男性が求める＜地区の行事が分かる＞＜地区内での有事の際の対応が分かる＞＜地区内の人との関係性が分かる＞といった地区のしくみや行事等の段取りは、そもそも地区で育ち、成長に伴い自然と身につく、その中で役割責任が増えることにより必然的に理解できてくるものである。しかし、その地区で幼少期から生活していない向老期男性にとって、現在居住する地区という組織を理解する事は新鮮な事であり、得られた人間関係「顔見知りの関係が築ける事」を含めると、住み続けるための安心材料になっていたものと考えられる。

さらに、本研究における向老期男性の求める地域とのつながりは、これまでの地域とのつながりを強く求める農村地域の高齢者や女性のものとは異なり、一定の距離感を保有するものであった。このことはB地区が新興住宅地であるという特徴が影響しているものと考えられる。よって、本研究における定年退職前の向老期男性が求める地域とのつながりは、新興住宅地の特徴を反映しているものだと考えられる。

また、定年退職前の向老期男性というのは、現在、就労している働き世代の男性である。そのため、一定の収入があるという特徴がある。安定した収入による生活の保持が求められる、そのために社会面精神面身体面を良好に保つため、不足部分を地域とのつながりに求めているものと考えられる。そして、退職を機に、決められた活動時間がなくなると生活のメリハリを求め、予定がある楽しみ、責任を持つことにやりがいを見出ししていくというつ

ながりにシフトしていくものとする。

(4) 定年退職前の向老期男性の地域活動への参加を促す支援のあり方

本研究および先行研究<sup>10, 19)</sup>において、定年退職後に高齢男性がスムーズに社会参加するためには、いかに定年前に社会参加の経験の有しているかが重要であった。つまり、退職前からの社会参加の基盤づくりが必要である。

本研究における研究参加者全員が地区内の班長などの役割の経験を有していた。また、地域とのつながるための参加のきっかけとしては、【必然性によるもの】【活動の主体となること】【単純に行えるもの】であった。また、先行研究からも直接的に地域とのつながりから誘われること<sup>1)</sup>が挙げられていることから、まずは、輪番制などの必然性により、主体的かつ単純な役割を依頼することが重要であると考えられる。その活動の中あるいは活動後の交流などに男性共通である「酒」や「スポーツ」の要素を含めることも必要であろう。よって、退職準備段階の援助として、スポーツ活動や酒などを介した交流ができるような気分転換や開放感が得られる趣味活動等の参加するきっかけの提供が挙げられる。さらに、就労などによって時間的なゆとりのない人や社会参加を望まない人に対しては、時期を見極めた支援や本人が退職後に希望する活動に対する支援を行うことが重要である。一方で、経済的基盤の安定や、伴侶の存在、過去の社会参加の経験、居住地域においてネットワークを持っているなどの【若い頃からの積み重ねによって築かれた基盤的特徴】に当てはまらない人に対し、退職前から予防的な観点で支援が必要であることが示唆されたといえる。

4) 本研究の限界と課題

本研究は、新興住宅地域という特定の地域を対象としたため、その影響が反映されている。そのため、他の特徴を持つ地域などにおいて、結果を一般化することができないという限界がある。今後、さらなるデータの追加および様々な特徴をもつ地域や対象者を選定して検証することが課題である。

今後も定年退職後の高齢男性の社会参加の要因は変化していくことが予想されるので継続的な研究が必要である。

<引用文献>

- 1) 小野寺紘平・齋藤美華：高齢男性の介護予防事業への参加のきっかけと自主的な地域活動への継続参加の要因に関する研究，東北大学医学部保健学科紀要 17 (2), 107-116, 2008.
- 2) 島貫秀樹, 本田春彦, 伊藤常久, 他：地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLとの関係，日本公衆衛生雑誌，52(9), 749-759, 2007.
- 3) Oman D, Thoresen C, McMahon K: Volunteerism and mortality among the

- community-dwelling elderly, Journal of Health Psychology 4,301-316,1999.
- 4) Van Willigen M :Differential benefits of volunteering across the life course, Journals of Gerontology 55B, S308-S318,2000.
  - 5) 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, 他: 高齢男性の社会参加要因, 川崎医療福祉学会誌, 17(2), 437-443, 2008.
  - 6) 船山和志, 堀口逸子, 辻本愛子, 丸井英二: 横浜市K区における前期高齢者の健康づくりに関連する要因について, 順天堂医学, 53(3), 438-445, 2007
  - 7) 松坂由香里, 西田厚子, 堀井とよみ, 平英美: 退職移行期にある中高年のアクティブ・エイジングと健康との関連に関する実証的研究, 健康医科学研究助成論文集, 20, 121-130, 2005
  - 8) 西田厚子, 堀井とよみ, 筒井裕子, 平英美: 自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究, 人間看護学研究 4, 75-86, 2006
  - 9) 長徳友美, 極本絵里子, 柴田しおり, 田中理子, 織田初江, 細見博志: 健康づくり推進員活動を行う退職後男性の捉えるサクセッフルエイジング, 金沢大学つま保健学会誌, 31(1), 2007
  - 10) 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, 山脇優子: 高齢男性の社会参加要因, 川崎医療福祉学会誌, 17(2), 437-443, 2008
  - 11) 高崎優, 鶴見信男, 桜井博文, 金高秀和, 佐藤友彦, 大沼剛志, 深沢雷太, 高崎朗, 羽生春夫, 岩本俊彦: 健やかな長寿社会へ向けての老年学会の取り組み高齢者の医療と介護福祉への期待, 日本老年医学会雑誌, 49(1), 27-32, 2012
  - 12) 山本裕子, AnbaeckenEls-Marie, 中塘二三生: 社会階級による高齢者の主観的幸福感の相違について人生暦を通して, 藍野学院紀要, 25, 7-17, 2012
  - 13) 河津拓, 山田孝: 定年制による男性退職者が作業を再構築していくプロセス, 作業行動研究, 16(2), 87-96, 2012
  - 14) 滝澤寛子, 若林佳子: 退職男性の地域活動グループの育成とグループ活動の変化からみた活動推進要因, 日本健康教育学会誌, 21(3), 236-244, 2013
  - 15) 柴崎孝二, 飯島勝矢, 菅原育子, 矢富直美, 前田展弘, 秋山弘子, 後藤純, 廣瀬雄一, 笈田幹弘, 佐藤祥彦, 辻哲夫, 鎌田実: セカンドライフ就労を介したシニア世代の身体活動量の変化に対する検討 AginginPlaceを目指して, 日本未病システム学会誌, 19(2), 107-111, 2013
  - 16) 鈴木政司, 田中友規, 柴崎孝二, 秋山弘子, 飯島勝矢: シニア世代の就労を介した身体活動量の増加と体組成への改善効果, 日本未病システム学会雑誌, 20(1), 94-98, 2014
  - 17) 菅原育子, 矢富直美, 後藤純, 廣瀬雄一, 前田展弘: 中高年者の就業に関する意識と社

- 会参加首都圏近郊都市における検討, 老年社会科学, 35(3), 321-330, 2013
- 18) 澤岡詩野: 都市部の企業退職者の社会活動と社会関係におけるインターネットの位置づけ後期高齢期にあるシニア情報生活アドバイザー資格取得者の語りから, 応用老年学 8(1), 31-39, 2014
  - 19) 片桐恵子: 過去の社会参加経験が現在の社会参加に及ぼす影響 東京都練馬区と岡山県岡山市の調査結果, 老年社会科学, 35(3), 438-445, 2007
  - 20) 長徳友美, 極本絵里子, 柴田しおり, 田中理子, 織田初江, 細見博志: 健康作り推進員活動を行う退職男性の捉えるサクセッフルエイジング, 金沢大学つま保健学会誌, 31(1), 32-40, 2007

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文](計0件)
- [学会発表](計1件)
- [図書](計0件)
- [産業財産権]
- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齋藤 美華 (Mika, Saito)  
山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授  
研究者番号: 20305345

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

川原 礼子 (Reiko, Kawahara)  
東北大学・医学系研究科・名誉教授  
研究者番号: 40272075

下山田 鮎美 (Ayumi, Simoyamada)  
東北福祉大学・健康科学部・准教授  
研究者番号: 20315576

尾崎 章子 (Akiko, Ozaki)  
東北大学・医学系研究科・教授  
研究者番号: 30305429

### (4) 研究協力者

村崎 (東海林) 志保 (Siho, Murasaki)  
坂川 奈央 (Nao, Sakagawa)  
大友 総 (Sou, Outomo)  
後藤幸恵 (Yukie, Goto)